

日本と台湾の大学間における英語による オンライン共同学習の考察

田中直子

目次

1. はじめに
2. 本研究の目的
3. 本研究と共同学習活動の概要
 - 3-1. 本研究の概要
 - 3-2. 共同学習活動の概要
 - 3-3. 参加者と履修クラスにおける活動の位置づけ
4. 結果と考察
5. 今後の課題

[要旨]

本研究では日本と台湾の大学で英語を学ぶ学生同士がオンライン上でMoodleを介して英語での意見交換による共同学習を行い、活動後に実施したクエスチョネアの回答の分析や、学習活動に対する学生の取り組みの様子を教師が観察することにより、活動の学習効果を検証し今後の課題を考察した。具体的には、①学習への動機づけ、②目標言語を使う機会の増加、③Computer Mediated Communication : CMCをあらたな学習方略として理解する、の3点を研究の目的として活動を実施しその効果を検証した。日本側参加者についてクエスチョネアへの回答分析結果から、①-③全ての目的が達成されたと認識できた。また共同学習活動を通じて、日本側参加者の約半数が異文化への興味と理解が促進されたと回答した。

1. はじめに

近年のインターネットとそれを利用したアプリケーションソフトの飛躍的進歩によって、世界中の人々間のコミュニケーションが可能になり、e-learningも容易になってきた(ハグリー・エリック&クラウゼ=小野・マルギット, 2011)。こうしたコンピューターを介した交流や共同学習はComputer Mediated Communication (CMC) と呼ばれ、現在様々な方法により外国語学習の手段として用いられている。欧(2014)によると、CMCを語学の授業に取り入れることによる変化の特徴として、以下の2点がまとめられ

る。1つ目は、言語学習におけるコミュニケーションは、インターネットを介し、教室から教室外へと広がっていったということである。2つ目は、言語教育におけるコミュニケーションは多様化また日常化されつつあるということである。

CMCには様々な形式があり得る。意思伝達を行う為の媒体については、文字、映像、動画がある。利用できるシステムも多種多様にあり、その活動の内容と目的によりSkypeやMoodle、e-mailやchatの形式など多くの選択肢がある。時間についてはリアルタイム(synchronous)か、リアルタイムではない(asynchronous)形かの選択がある。また人

数についても、1対1、小グループ、大規模な人数で行うかの選択がある。

さらに、使用言語の観点から見たこうした学習活動の分類についてHagley (2012)は、共通の目標言語のみで共同学習を実施する形式 (Collaborative learning type) と、参加者 (又はグループ) が互いの目標言語母語話者であり、それらの両言語を用いて学習を実施する形式 (Cooperative learning type) に大別している。

2. 本研究の目的

Harrison & Kitao (2005) は、CMCが英語学習者にもたらすものとして、既に学んだことを実践的に使い流暢さを向上する機会、学習への動機づけになる可能性を指摘している。本研究に参加した日本、台湾それぞれの学生は教室外で目標言語を使用する頻度は非常に少なく、英語を用いて海外に住む外国人とコミュニケーションをした経験も少ない環境にあった。このため本研究では、海外に住む相手校の学生と複数のトピックについて英語を用いて意見交換を行う共同学習を実施し、「学習へのさらなる動機づけ」が促進されることを第一の研究目的とした。

また、共同学習を行うことで「普段より英語を使う機会を増やすこと」を第二の目標とした。Spijkerbosch (2013)によればこうした目標言語でのやりとりは参加者間にその言語での意味交渉をもたらす。参加者は共同学習を通じて相手校学生と目標言語で意見交換 (意味のあるやりとり) を行うことで、Long (1996) のインタラクション仮説に見られる、意味交渉 (negotiation of meaning) が発生し、これにより言語習得の可能性が高まると考えられるためである。

さらに、「CMCをあらたな学習方略として理解すること」も重要と考え第三の研究目標とした。ハグリー・エリック&クラウゼ=小

野・マルギット (2011) は、CMCは外国語学習にとって重要なツールである。なぜならば、物理的に他国にいる学生と交流の場を持たない場合でも (特に地方の大学ではこのような問題が顕著である)、CMCがその代用となりうると考えられる、と述べている。

上記以外に研究目標には設定しなかったが、「異文化への興味と理解の促進効果」も高いであろうと予測し本研究を実施した。

3. 本研究と共同学習活動の概要

3-1. 本研究の概要

本研究は平成25年度に本学短期大学部英文学科の「英語技能演習Ⅱ」の科目を履修する学生と、台湾にある国立中山大学 (National Sun Yat-sen University) で「英作文」の科目を履修する、英語を主専攻とする学生間で、英語によるリアルタイムではないオンライン共同学習を文字のみで行い、活動後に実施したクエスチョネアの回答の分析や、活動に対する学生の取り組みの様子を教師が観察することにより、共同学習の効果を検証し今後の課題を考察したものである。

3-2. 共同学習活動の概要

参加者は両クラスそれぞれ約20名、実施期間は約6週間となった。活動は自己紹介のやり取りから開始し、続いて教員が選んだ下記のトピックについて意見交換を行う形で実施した。トピックごとにディスカッションを行う小グループのメンバー構成をあらためた。活動は全てMoodleを利用して実施し、本学では全ての授業をCALL教室で行った。活動は授業内および授業後の宿題として行い、自分の意見の投稿と他の参加者の意見へのコメント投稿の最低投稿回数や文字数 (語彙数) なども指示し、活動の全てが評価の対象になるとした。

<ディスカッショントピック>

- 1 自己紹介
- 2 伝統的な食べ物と地域の食べ物
- 3 大学生活
- 4 人気のある観光地
- 5 将来の計画と夢

本活動では、Moodleのフォーラムモジュールを利用して英語による意見交換を行った。両校参加者の学生は先ず上記のトピックについて自分の投稿を指定されたMoodleのグループ内の「フォーラム」に投稿した。また、同じグループの相手校の学生の投稿に対してコメントをつけることが義務付けられていた。さらに、自分の投稿へのコメントに対しても返信のコメントをする義務があった。コメントの構成は「相手の投稿に対する感想／質問／自分の意見」を含むよう指示した。また、文字だけでなく写真の利用も奨励し、実際に写真を含んだ投稿が両校で非常に多くなされた。

3-3. 参加者と履修クラスにおける活動の位置づけ

本学側参加者は短期大学部英文学科の1年生で、前期開講科目「英語技能演習Ⅱ」の履修者であった。本科目は英語技能検定準1級の合格を目的とするクラスであり、既に英検2級または2級の1次試験に合格していることが履修条件として設定されている。このため英語のレベルはおおよそ英検2級から準1級の間と言える。

国立中山大学の参加者の英語力は、共同学習の内容から判断すると、全体として本学学生より少し高い英語力を持つ学生がほとんどであったと思える。これは投稿された英文の長さ、語彙力、構文力などからの総合的な印象による推測である。

平成25年度の場合も授業時間の多くは科目の目的を達成するために、英検準1級試験に

対応できる4技能を習得するよう問題集に取り組む活動が中心をなっていた。このため、共同学習は授業の一部の活動という位置づけになり、授業内で本活動を行う場合も、最大でも授業時間(90分)の1/4程度の時間内で実施し、後は宿題として授業外の時間に活動する形ですすめた。

4. 結果と考察

共同学習終了後、本学側参加者に実施したクエスチョネアの質問とそれに対する回答について議論する。

「今回の活動以前に外国にいる外国人と英語で交流をしたことがあるか」という問いについては、45%が「ない」、32%が「それほど多くはない」と回答した。この点に関連した自由記述式の回答においては、「生まれて初めて海外に住む外国人とやり取りを行う機会を持ち、共同学習の動機づけとなった／楽しかった」という回答が多々見られた。さらに「相手校の学生の投稿を読み刺激を受けたか」という問いには、36%が「とても刺激を受けた」、55%が「どちらかという刺激を受けた」と答えた。自由記述コメントには、「台湾の学生の英語力が高く、よい刺激を受けた」、「台湾の食文化、観光地、中山大学について学び、台湾に対してより興味を持つようになり、いつか訪れてみたいと感じた」という回答があった。Dörnyei (2001) は、言語クラスにおける動機付けのストラテジーとしての重要な要素に、「stimulating (刺激となる)」と「enjoyable (楽しい)」を挙げている。CMCを用いた本活動は、実際に英語をコミュニケーションツールとして用いる機会を学生に与え、言語と文化面での刺激を得られ、また活動を楽しんで行うことが出来た学生が多く見られたと言える。これにより本活動が学習への動機づけに有効であったと理解できる。

第二の研究目的である「共同学習中、普段より英語を使う量や時間が増えたか」という質問に対し、18%が「とても増えた」、50%が「どちらかという増えた」と回答した。両者を合わせると約70%の参加者が普段より英語を使う量と機会が増えていたことになり、目的はある程度達成されたと判断できる。

しかし、本活動では英語を用いて文字での意見交換を行うことを目的の一つとしたが、学生が投稿した英語の正確さや適切さ、表現の豊かさと言った質的な内容は分析できていない。クエスチョネアへの自由記述欄のコメントには、「分かりやすい表現を意識して用いた」「言いたいことが正確に伝わるよう、丁寧に辞書を引いた」「相手校の学生の用いた単語、表現をまねて使用した」と言った、英語を使う頻度や量ではなく、質の向上を意識したことがうかがえる記述も多々あった。今後はこの点も支援していけるような指導方法を考えたい。

第三の目的である「CMCをあらたな学習方略として理解する」、という点においては、クエスチョネアで「こうした学習方法は効果的なので、継続したいか」という問いを設けた。これに対して日本側学生の87%が「継続したい」と答えていた。この数値は高いものであると言える。本活動に参加した学生はCMCを利用し自国にいながら海外に住む外国人と英語で意思疎通をするという学習方略を体験し、また9割近い日本側学生が効果的と回答したことは本学習活動の成果であると思われる。

また、約半数の学生からSkype等を介した、動画や音声でのリアルタイムなやり取りを希望する回答があった。時差のある形での共同学習と比較し、即時に意見交換が可能なリアルタイムでの活動を行い、参加者の感想や英語力における変化を考察していくことも意義があると思われる。

さらに、本研究の目的とはしなかったが、

本活動においては異文化への興味と理解の促進も期待される効果であった。これに関連して「学習活動を通じて学ぶことができたと感じたもの」を選択回答する質問と、これについて自由記述で答える質問を設けたが、「台湾の文化（や習慣、考え方）について学んだ」とする回答が約50%あった。グローバル化が進む今日、外国語教育においても異文化理解は以前にも増して重要視されており、今後もこのような共同学習を通じて異文化への興味、理解を促進することは意義があると考ええる。

研究目的には設定していなかったが、学生による共同学習を観察することから教師が気づいたこととして、こうした活動による学習者中心 (student-centered) の活動時間の増加がある。Thorne & Black (2007) が述べる通り、CMCでは、従来通りの語学授業における教師中心 (teacher-centered) のコミュニケーションから、より多方向 (multidirectional) のインタラクションに変化する可能性がある。本活動では参加した学生は主に相手校の学生と自らの意見、考えをやり取りすることで、明らかに教師中心のコミュニケーションではなく、多くの学習者間のコミュニケーションを経験した。

活動の内容と本学における科目の関連については、英検準1級の1次試験では英作文の設問において外国人に対して日本の文化や生活習慣について簡潔に英語で説明する力が求められる。このため、本共同学習での意見交換では、複数のテーマを通じて日本の文化と生活習慣、その背景を説明する機会が多くあり、科目の目的にもかなった活動であったと言える。

5. 今後の課題

語学クラスにおけるCMCを取り巻く環境は日々進化しており、今後も様々な形での導

入が可能と思われる。

本研究では文字のみによる共同学習を実施したが、4技能の向上を考えた際にはやはり音声や動画を導入したやり取りがより理想的であるだろう。音声による活動を取り入れることで、「話す」「聞く」という技能を伸ばす効果が期待できる。また、技術面においては現在ではインターネット上での動画ファイルの送信、共有もより行い易くなっており、多くの学生が利用しているスマートフォンやタブレット端末に備わっている動画録画の機能を活用することも検討し、学生がより参加しやすい形に改善していくことも必要と思われる。

一方で、クエスチョネアの回答と学生から直接教師へ伝えられた意見として、両国側参加者からリアルタイムでの共同学習活動の希望、期間の延長を希望する声が多数あった。これらの点は相手国との時差、各大学の学期制度と時期の問題もあり計画段階で教員同士が検討しなければ実現は難しい。しかし、同アジアに位置する大学間であれば比較的時差が少ないため、リアルタイムでの共同学習も不可能ではないと言える。

教員側の活動の為の準備、活動中の関連する仕事の量については、通常の授業準備よりも多くの時間が必要であったと言える。これはMoodleの設定、ディスカッショントピックの決定、学生の様子、学習レベルなどの情報共有などが含まれるが、全てはメールによるやり取りで行われた。多くの時間を要した理由の一つは、同大学間での交流活動を今回初めて実施したため、事前の話し合いに多くの時間を要したことが大きい。今後の可能性としては、共同学習活動を同2大学間で継続していくことが出来れば、それまでの共通理解があり、既に準備の出来た資料などの再利用も可能となるため、新たな共同学習への準備や計画のための話し合いの時間を減らしていくことが出来ると思われる。

またこうした共同学習を行うにあたって

は、教員には先ず適当な相手校を見つけることが必要となるが、この相手校探しも多くの労力を要する。今回はcollaborative learningの形で、共通の目標言語である英語のみを用いて実施したが、共同学習の目的をどう設定するかによりcooperative learningの形での実施もありえる。この点についてはHagleyの述べる通り、世界的に見た英語学習者数の多さから、collaborative learningでの英語によるCMCの相手校を見つける方がより易しいと言える。

授業内における活動の時間配分については、本学の場合英検対策のクラスという点から、交流学习に多くの時間があてられなかったが、共同学習を取り入れる際は、科目の特性に応じた時間配分のバランスを考慮することもとても重要である。

また学習効果の検証方法には、本研究で用いたクエスチョネアの回答分析と教師による観察を中心とした方法以外のやり方も検討が必要と思われる。その上で、大学の授業という枠組みの中で目標言語の実践的使用やグローバル化の時代における異文化理解促進の重要性の観点から、工夫と改善をしながら授業に取り入れていく価値のある学習活動であると考えている。

最後になるが、当然のことながらCMCの実践には教員側にもコンピューターを利用する技能が必要となる。また、学生が円滑に活動を進めるためには、本研究であればMoodleのコース設定、IDの発行、管理、学生が利用する際のサポート等、様々な技能が必要となる。本研究実施に際しては、北星学園大学短期大学部のGettings教授に多くのサポートと適切な助言を頂いたことに深く感謝したい。

[参考文献]

ハグリー・エリック&クラウゼ=小野・マルギット. (2011). 外国語教育にオンライン国際共同語学学習やCEFRの導入. 工学教育研究講演会講演論文集 平成23年度 (59), 10-11, 公益社団法人日本工学教育協会

欧, 麗賢. (2014). 目標言語話者とのEメールのやりとりを通じた教室外の日本語学習. 阪大日本語研究 第26巻. (pp.113-137)

Hagley, E. (2012). Collaborative and Cooperative Online Language Exchanges.

Harrison, Marlen E. & Kitao, S. Kathleen. (2005). Keypal Friendships and Their Influences on Learner Development. CALL-EJ Online Vol.7, No.1

Spijkerbosch, P. (2013). CMC in a Japanese educational context. 松山大学言語文化研究 第33巻第1号. (pp. 141-162)

Long, M. (1996) The role of the linguistic environment in second language acquisition. In W. Ritchie and T. Bhatia (eds) Handbook of Language Acquisition, Volume II: Second Language Acquisition (pp. 413 -68). New York Academic Press.

Dörnyei, Z. (2001). Motivational Strategies in the Language Classroom. 5th printing. (pp.72). CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS

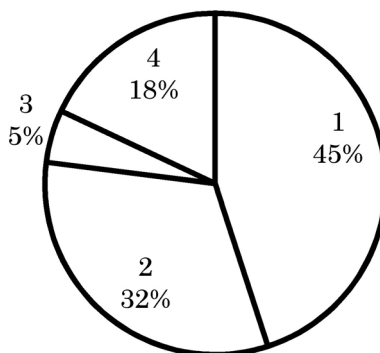
Thorne, S. L & Black, R. W. (2007). Language and Literacy Development in Computer-mediated Contexts and Communities. Annual Review of Applied Linguistics 27, 1-28.

<クエスチョネア質問と回答データ>

Q：今回の活動以前に外国にいる外国人と英語で交流をしたことがありますか。

回答

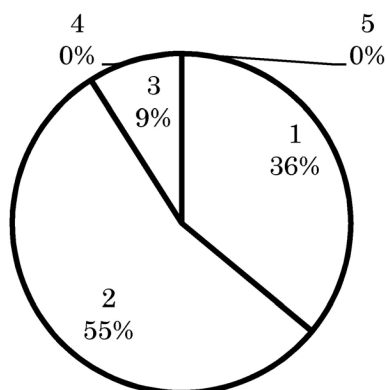
1. 今回が初めてだった
2. あるが、それほど沢山の経験はない
3. 沢山の経験がある
4. 今も行っている



Q：相手校の学生の投稿を読み刺激を受けることはありましたか。

回答

1. とてもそう思う
2. どちらかと言うとそう思う
3. どちらとも言えない
4. あまりそう思わない
5. 全然そう思わない



Q：共同学習中，普段より英語を使う量や時間が増えましたか。

回答

1. とてもそう思う
2. どちらかと言うとそう思う
3. どちらとも言えない
4. あまりそう思わない
5. 全然そう思わない

